

伊能忠敬とシーボルト —伊能図をめぐるグローバル展開—

徳島大学総合科学部 教授
平井松午(歴史地理学)

徳島大学附属図書館には未完成ではあるが、伊能忠敬(1745~1818)作製の日本図が所蔵されている。日本東半図の「沿海地図」と日本西半図の「大日本沿海図稿」である。これらの日本図に第8~10次の測量成果を加えて、忠敬没後の文政4年(1821)に、上司にあたる高橋景保らが完成させたのが「大日本沿海輿地全図」で、最終版「伊能図」とも呼ばれる。

文政11年(1828)9月に起きたシーボルト事件をご存じの方は多いだろう。当時まだ鎖国を続けていた日本において、長崎出島オランダ商館付の医師フィリップ・フランツ・フォン・シーボルト(1796-1866)が帰国する直前に、所持品の中から国外持ち出し禁止とされた日本図などが見つかり、国外追放となった事件である。シーボルトに日本図を渡した幕府天文方の高橋景保は伝馬町牢屋敷に投獄され、翌年獄死している。この日本図こそ、「大日本沿海輿地全図」の伊能小図を縮小編集し、地名をカタカナ表記にした「仮名書き特別小図」と呼ばれる伊能図で、現在は国立国会図書館に所蔵されている。シーボルトは片仮名文字が読めたようである。

しかし、「仮名書き特別小図」を没収されたシーボルトが、なぜ帰国後に伊能図をベースとした日本図を出版することができたのか、これまで謎であったが、国立歴史民俗博物館の青山宏夫教授らによる近年の調査で、その写図がシーボルトの末裔にあたるドイツのフォン・ブランデンシュタイン=ツェッペリン家で発見されたことで、この謎も氷解するところとなった。

シーボルトは1826年にオランダ商館長カピタンの江戸参府に随行して江戸を訪れ、4月10日~5月18日の在府中に大槻玄沢や高橋景保、蝦夷地(北海道)・北蝦夷地(樺太・サハリン)を踏査した近藤重蔵や間宮林蔵らとも会っている。こうした経緯の下にシーボルトは景保や重蔵から「仮名書き特別小図」や蝦夷図を入手し、それらの一部はオランダのライデン大学図書館に所蔵されている。

シーボルトは、来日翌年の1824年には長崎に鳴滝塾を開き、高野長英・二宮敬作など多くの門弟を育てている。阿波出身者では鳴滝塾塾頭をつとめた美馬順三や、のちに大坂で眼科を開業した高良齋もシーボルトに学んでいる。高良齋はシーボルトの江戸行きに同行し、シーボルト事件では塾居を命ぜられたとされる。シーボルトがわずか5年の長崎滞在中に収集したのは約200点の絵図・地図類のほかに、日本の植物・動物・鉱物・書物・日用品など極めて多岐にわたり、総点

数は2万点以上にも及ぶ。全国から集まってきた塾生たちが、これらのコレクションの収集にあたったとみられる。

1600年頃の大航海時代に活況を呈したオランダは当時衰退し、イギリス・フランスやロシアなどのヨーロッパ列強国に押されていた。オランダは西欧

諸国で唯一、日本と外交関係を有していた国であったことから、シーボルトの来日の目的は対日貿易再建のための物産調査にあつたともいわれている。帰国したシーボルトは日本の収集品を常設展示する施設をオランダ国や出身地のバイエルン国王に働きかけており、それは今日、オランダ・ライデンのシーボルトハウスや国立民族学博物館、ドイツ・ミュンヘンの五大陸博物館の創設につながっている。

当日の公開セミナーでは、シーボルトが収集した日本図や阿波国絵図・淡路国絵図、近藤重蔵がシーボルトに送った北方図、イギリスに渡った日本図などの紹介を通して、幕末期における日本開国と伊能図の意義について再考することとしたい。

総合科学部公開セミナー

第1回: 1月27日(金) 18:30~20:00

対象: 一般・大学生・高校生 参加費無料

会場: 総合科学部1号館南棟3階 第1会議室
事前申込が必要。駐車場の利用可。

詳細: 総合科学部 HP

<http://www.tokushima-u.ac.jp/ias/>

申込み・問い合わせ先:

徳島大学総合科学部事務課総務係

TEL: 088-656-9779

E-mail: sksoumks@tokushima-u.ac.jp



シーボルトの胸像
(ライデン・シーボルトハウス)
2011年11月 平井撮影